

ロシア人の見たロシア人士官と稲佐の ラシャメンの“結婚”について

Взгляд русских на «браки» между русскими офицерами и японскими «женами»

中 條 直 樹* 宮 崎 千 穂**

はじめに

日本人女性は、ヨーロッパ人が日本人に出会って以降、明治時代に至るまでおおそ高い評価を得ていた¹。開国以降は、より頻繁な外国船の来港によってヨーロッパ人男性と日本人女性との“結婚”がより身近で盛んとなり、来日するヨーロッパ人の中で日本人女性の評判も広まっていった。そのような中で、ロシア人も幕末からおおよそ日露戦争に至る時期まで長崎の稲佐においてロシア人士官の“妻”となっていた日本人女性について多く記すようになる。多くのロシア人士官たちが稲佐において日本人女性を“妻”としていたロシア人の目に、いかに日本人女性は映っていたのであろうか、また、独特ともいえる日本人女性との“結婚”をいかに理解していたのであろうか、主に来日したロシア人の旅行記、回想録を紐解きながら検討したい²。

1. <理想的>で<理性的>な<好ましい>日本人女性像

1. 1. 日本人女性との“結婚”への憧れ

稲佐にてロシア人士官たちが“結婚”生活を送るようになって以来、日本人女性(=“妻”)に対するロシア人の評価はおおよそ高いといえる。具体的に、彼女たちはロシア人にどのように評されていたのであろうか。

クラスノフは次のようにロシア人士官の日本人“妻”たちを描いている。

ふつう、稲佐の主人が帰るのは、ホテル的な外観で主人に孤独感や、親戚や知人から遠く世のはずれに主人を遣った運命を思い起こさせる誰もいない家にはではない、主人を、ふつうに“妻”が待っており、妻はできうる限り、ロシア語でどこにいて何を見たのかと質問責めにし、お茶を出し、お腹がすいていると、都合良くテーブルに置いた小さな素焼きのこんろで主人の好きなロシアの食べ物または土地の食べ物を主人に料理するのである。³

* 名古屋大学大学院国際開発研究科教授

** 名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻後期課程

故郷から遠く離れた土地、日本で、孤独を覚えかねないロシア人士官の“夫”を、一時的ではあってもあたかも本物の妻のように料理や優しい言葉で甲斐甲斐しく面倒をみ、“夫”たちに家庭を感じさせてくれる女性として日本人女性の姿が浮かび上がる。クラスノフは、さらに次のようにも述べている。

日本の人々のよく気がつき、優しい性格は、他人の感情や悲哀に応じたり、人の良いところが見える人間を心から好きになることのできるロシア人に似ており、日本の女性においては、極東アジアの国民に特有である対応の柔らかさと礼儀正しさを求める行儀作法に結びついている。我々から見れば、これら小柄な日本の女性たちが殊に美しいとはいえない。だが、彼女たちの多くは、その性格で自分たちの一時的な夫たちに自分を愛させ、彼女たち自身はよりいっそう彼らを愛していた。コルヴェート艦あるいはフリゲート艦の出帆の際には、感動的な別れの場面が見られ、残される妻たちは、去り行く者たちを見送るため、出帆していく軍艦の後を長い間追ひ、舟からハンカチを振っていた。⁴

ここでは、日本人女性の容姿こそ誉めてはいないが、ロシア人の“夫”を魅了する日本人女性の性格的な美点が語られており、日本人女性たちが日本人全般にいわれるような、「よく気がつき、優しい」性格である上、極東のアジア人のもつ「対応の柔らかさ」、「礼儀正しさ」をあわせ持っていることが示され、彼女たちが一時的な“結婚”で結ばれたに過ぎない自分の“夫”にも“愛”を与え、感動的な“別れ”をも創出する人情味溢れる女性としてロシア人の目に映っていることがわかる。もちろん、クラスノフは、このロシア人と日本人女性の関係が人身売買に基づくものであり、“妻”は“夫”が出帆すれば、次の“夫”と暮らすことも承知しているが、日本人女性の一時的な“夫”に対する思い遣りをおろそかに評価していない。

日本人女性に対する肯定的な評価は、他にも見られる。ユジャコーフによれば、ヴラジヴォストクでは、長崎での「我が水兵たちの家庭生活の物語」がたくさん流布しており、「日本人女性の性格について、教養の高さ、善良で人なつっこい心、主人や母としての見事な資質についての共通の評判は、最も可愛らしく優美な女性像の描写になる」⁵というように、「教養の高さ」、「善良さ」、「人なつっこさ」、「愛らしさ」、「優美さ」、「主人や母としての見事な資質」が日本人女性像として長崎を寄港地としていた義勇艦隊や軍艦の母国の港、ヴラジヴォストクで評判となっていたことが知られる。

シュレイデルによれば、「ヨーロッパ人たちは、自分の妻を、美しく優美な日本人女性であり、一般に十分に教養のある女性であると有頂天になって評している。」⁶とあるように、ヨーロッパ人すなわちロシア人が“妻”たる日本人女性を「美しく」、「優美」

で、「教養高い」女性と認め、誇らしげに語っていたことがわかり、また女医チエレフコヴァには、「最下層の女性ですらもつ日本人女性特有の善良さ、柔らかさ、優しさそして女らしさのおかげで、こういった“妻”たちは、自分の“夫”たちに、心から自分たちに惹きつけるような感情をしばしば起こさせる」と評され、「善良さ」、「柔らかさ」、「優しさ」、「女らしさ」という点が評価されて日本人女性全般の女性的な性格がロシア人を魅了していたことが述べられている。

実際に日本人女性と“結婚”したアレクサンドル大公も、日本人女性をやはり“妻”として理想的な女性と評価している。「この日本娘の性格の快活さは驚くべきものであった。彼女は一度も顔をしかめることも怒ることもなく、すべてに満足していた」と快活で明るい女性として、あるいは「私は、親友たちを歓待するために彼女の愛情を煽ったが、なんともたいへんな品格でもってこの人形が客をもてなす女主人の役を演じるのは見惚れて飽くことはなかった」と自分の“妻”を“妻”としての役割を見事にこなせる女性として賞賛している。

以上からわかるように、ロシア人によって描かれている日本人女性は、女性として高く評価されているが、それは彼女たちがロシア人にとって<好ましい>女性であったということを示しているのではないであろうか。日本娘は、「最も愛らしく優美な女性」とされ、「教養高く」、「善良さ」、「人なつこさ」や「主婦、母親としての資質」、「美しさ」、「優雅さ」、「品の良さ」、「女性らしい柔らかさ」、「礼儀正しさ」、「快活さ」、「温和さ」などの点でよい評判を得ており、この<好ましさ>は、女性らしさや家庭的な点を基準に判断されていると考えられるのである。

もちろん、これらの日本人女性への評価は、“結婚”と関連があることは言うまでもない。ただし、ロシア人にとって、長崎において興味をもてるものは限られており、日本人女性との楽しみがその大部分であったことも日本人女性の評価を高くする理由の一つともなったともいえるのではないだろうか。アレクサンドル大公の回想録のうち日本滞在分⁹は、稲佐での“結婚”生活の話が主体であり、回想録を記す際に“結婚”が日本の思い出の中でも主要なものであったことがうかがえる。また、次のように、ロシア人の興味対象がお茶屋遊びや稲佐のラシャメン（洋妾）の筆頭であった道永エイの話、外国人の観光名所の諏訪神社やロシア人が多く訪れたというユダヤ人経営のホテルなどごく限られたものであったことも見受けられるのである。

実際、我々ロシア人は驚くほど好奇心の乏しい国民である。私は、ウラジヴォストクで、長崎に半年いっぱい過ごしたのに、一度も日本の法廷を覗くことなく、主要な寺である諏訪神社を除いて寺のひとつも見ることなく、一校も学校を訪れることなかった多くのロシア人を知っている。通常、長崎について話し始めると、皆、“茶屋”

の話、稲佐の美女お栄さんがストウカルカやシュトスをする話やユダヤ人のホテルの話になる。¹⁰

このように、日本人女性への賛美、日本人女性の〈好ましい〉女性像には、長崎においてロシア人の興味対象が数少なく限られたものであったこと、それゆえにその中では日本人女性との関わりがロシア人の関心事の多くを占めざるを得なかったことの影響もあったといえるのではないであろうか。

1. 2. ロチの影響

フランス人作家ピエール・ロチとその作品『お菊さん』はロシア人の記述の中にもよく登場する。明治20(1887)年の『お菊さん』発表以前から長崎において外国人男性と日本人女性との“結婚”は西洋人の間で広まっていたが、『お菊さん』以後のロシア人の記述には、初めて訪れる日本の風景にデジャヴを覚えたり、ロチの小説を重ね合わせて眺めているふしがみられ、これは、ロチの『お菊さん』が西洋人だけではなくロシア人に及ぼした影響が大きかったことをうかがわせる。

例えば、あるロシア人は、「私は、山中にあり、そこから長崎の素晴らしい景色が開けている神社についてのピエール・ロチの偉大なページを思い出しして人力車を利用したと述べているが、その後続く日本の描写もロチの作品を思い出しているかのように異国情緒たっぷりである¹¹。作家ガリンも、入港した長崎の風景にデジャヴを覚え、「ピエール・ロチ！！クリザンテーム」と心の内で叫び、日本人を見て「クリザンテーム」の親であると、また寺院でコーヒーを出す娘を「クリザンテーム」と呼び、「私に押しつけられたロチの印象から逃れることは長らくできなかった¹²と述べており、日本の風景や日本人の様子がロチの作品に重なってしまうことを隠そうとしない。

このように、長崎を訪れたロシア人には、ロチの『お菊さん』に関する知識があったことがわかる。次に挙げるように、日本にやって来るまでの航海中に、ロチの作品を読んで日本に関する知識を深め日本上陸に備える様子もみられることから、船中で『お菊さん』が読まれることが少なからずあったのではないかと思われる。

退屈な航海に、日本について手元にあったものすべてを繰り返し読み、版画を全部繰り返しながめた。大部分がピエール・ロチの“M-me Chrysanthème”の中での日本についての記述の新鮮な印象であった。我々を取り巻く独自の環境の印象は、それゆえに予め感じていたかのようなであったが、実際、それでも予想を超えていた。¹³

この記述から、船上で読んだロチの作品のおかげで、日本の様子にデジャヴを感じて

いることが明らかである。後にニコライ二世となったロシア皇太子ニコライも、日本に着く前に海上で「日本旅行の準備」にロチの『お菊さん』を読み始めた¹⁴といい、日本への航海中に乗組員たちが日本についての知識を絵画や『お菊さん』から得るといったことがあったことがうかがえる。長崎を初めて訪れたロシア人たちにとって、長崎の街や日本人女性は、『お菊さん』に関する知識等によって、初めて接するものではなく、「予め感じていた」ものであったのである。

さらに、異国としての日本及びお菊さん (= 日本人女性) への憧れのみならず、日本人女性との“結婚”についてもロチの影響があったことは、当然ながら、否定できない。

ピエール・ロチと他の水兵たちのおかげで、日本ではありとあらゆるヨーロッパ人が任意の期限で好きな日本娘を娶ることができるというような考えがかなりしっかりと守られるべきものとして私たちの間で広まっている。¹⁵

このようにロチの小説がヨーロッパの水兵たちに日本人女性と“結婚”することを励んでいたことがロシア人女医チェレフコヴァによって書き留められている。これだけでなく、チェレフコヴァはロシア人士官たちと“結婚”していた日本人女性たちをロチの作品名でありヒロインの名でもある「Madame Chrysantème」と呼んでおり¹⁶、日本人“妻”を「お菊さん」と呼ぶほどにロチの作品中のヒロイン「お菊さん」は日本人“妻”の立場を説明しやすい言葉であったことがわかる。これに関連して、他にも「日本の港湾都市に疑いなく存在する“M-me Chrysantème”の中の風習や慣習の記述は日本の風習というよりは港町の風習である」¹⁷というように記されることもあり、ロチの「お菊さん」は、日本での“結婚”を含め日本の慣習について外国人に説明するのに便利な言葉であったといえよう。

さらに稲佐に関していえば、「ここ稲佐で有名なフランス作家ピエール・ロチが自分の“お菊さん”をモデルにして書いたと思われる。」¹⁸といったシュレイデルの間違いもみられ、これは、実際フランス人であるロチは長崎の市街地方面の十善寺で“結婚”生活を送っていたにも関わらず、それを間違えてロシア人の居住地であった市街地の対岸である稲佐においてロチが生活し、『お菊さん』を書いたと思いこんでいたロシア人の例であり、『お菊さん』に強く影響されていたといえる。また、これは、これほどまでに稲佐にはロチの作品中の“結婚”生活を彷彿とさせる光景があり、そしてそれが稲佐において顕著な現象であったことも示していよう。

このように、ヨーロッパで大流行したロチの影響はロシア人にも及んでいたことがいえる。しかし、ヨーロッパでは、このロチの『お菊さん』そして、それに続くプッチーニのオペラ『蝶々夫人』が有名になり過ぎたためであろう。アレクサンドル大公は、こ

これらの作品以前から長崎での“結婚”は有名で、反対にこれらの作品を生むことになったのが長崎での一時的な“結婚”であったことを改めて主張しているほどである¹⁹。

1. 3. ロシア人のみた<理性的>な“妻”たち

これまでに見てきたように、ロシア人たちは、『お菊さん』への憧憬を含め、日本人女性が、第一に<好ましい>女性であるとのイメージを持っていたことがわかった。しかし、その一方で、ロシア人は日本人女性のもう一つ違った姿もとらえている。それは、“結婚”に対する日本人女性の<理性的>な姿勢である。これは、ロシア人には<不思議>な姿と映り、さまざまに受け止められた。

まず、ロシア人士官の相手となっていた“妻”たる日本人女性に対するアレクサンドル大公の見方を挙げたい。

彼女たちは、優美さと信じられない理性との奇妙な混合物であった。彼女たちの同胞は、彼女たちと外国人との関係を理由に彼女たちを追放しないばかりか、彼女たちの生活様式を女性に開かれた社会的活動形式のひとつとみなしている。彼女たちは、将来日本人のところへ嫁して子供を得、最もブルジョア的な生活様式をしようと思っている。しばらくは、彼女たちに陽気な外国人の士官たちと交際を共にする覚悟があるが、もちろん、上手に、然るべき敬意をもって彼女たちを遇するという条件があるときだけである。ある士官の“妻”と恋の戯れを始めるためのあらゆる試みは、これまでであった慣習の壊乱であったらうに。彼女たちの特定の世界観は西欧の思想のどんな痕跡もなかった。東洋のあらゆる住人として、彼女たちは倫理的な純潔と精神的な貞操を説いており、彼女たちの目には肉体の純潔よりもそれらをはるかに崇高な価値があるのである。ヨーロッパあるいはアメリカの作家の誰も日本の理性主義のこの特性を解釈しえるものはほとんどいない。悲嘆に暮れた“蝶々夫人”は日出ずる帝国で爆笑を呼ぶ。なぜなら、^{キモノ}着物を着ている女性はひとりも、死ぬまで“夫”といることができるというつもりでいるような馬鹿ではないからである。²⁰

これは、大公のロシア人士官の“妻”たちに対するもう一つの認識といえる。これに従うと、ロシア人士官の日本人“妻”たちは、非常に<理性的>に自分たちの“結婚”をとらえている。第一に、ロシア人士官の“妻”たちを取り巻く環境が、彼女たちの行動を「社会的活動形式のひとつ」と認め、この“結婚”に対しロシア人が感じるような<不道徳>としていない。第二に、日本人の娘たち自身も外国人の一時的な“妻”になることを将来日本人に嫁して家庭を築き裕福な生活をするための道と考えていて、西洋の倫理観にはあてはまらない独自の倫理観、すなわち「肉体の純潔よりもはるかに崇高

な価値がある」、「倫理的な純潔と精神的な貞操」観を抱いている。すなわち、ここでは娘たち自身も環境も一種の仕事として外国人士官との“結婚”を<理性的>にとらえていることが観察されているのである。そして、アメリカ人士官と“結婚”して子供を得、“夫”の再来日をひたすら待ち続けた果てに自分がおもちゃのように棄てられたのだという現実を知らされて自害した『蝶々夫人』のヒロインの悲しみは、日本娘や彼女たちを取り巻く環境の倫理観を理解し得ない外国人によってつくり上げられたもので、稲佐の“妻”たちには無縁であると大公は確信していることがわかる。このような<理性的>な日本人“妻”たちの姿は、実際に“妻”を“娶った”ロシア人の目に映った現実的側面であろう。

外国人の“妻”となる女性たちの環境、すなわち日本の結婚形態及び結婚観に関連したものでは、「結婚はここでは市長の面前にて par devant monsieur le marie 永遠に結ばれるようなものと定められ」ているであるとか、「結婚は sacrament を受けず、ヨーロッパで état civil と呼ばれるものは日本にはない」²¹ というように指摘して、日本における結婚そのものが教会儀式を経て結ばれるような<神聖>なものではないことから、日本人女性がロシア人士官との“結婚”を深刻に考えていないことを説明しようとする者もいる。

ロシア人士官との“結婚”を深刻なものと考えない日本人女性の感情は、その他にも指摘されるものである。チェレフコヴァは、「この階層の女性たちは、自分たちに若さと魅力という点において何か身体的な資質があるのならば、ヨーロッパ人との一時的な関係を有利で利益ある収入源と見なし」²²、子供が生まれても、「それにもかかわらず、日本人女性自身も彼女たちのいわゆる“夫”たちも、この関係を一時的な軽いもので真剣なものではないと見なししている。このような“妻”たちが自分の“夫”のもとを去り、その友人のところへ移ることは稀ではないが、話題にもならない。一シーズンのうちにすら何度もかような移動が時折あるのである。」²³と日本人女性の“結婚”観を挙げている。しかし、この際、チェレフコヴァは、ここでいう「この階層の女性たち」とは、「例外なく この地の人々の最下層の女性たち」^{クーリー}、「各港町やその近郊の住民のかなりを占める苦力、船夫、人夫などの人々の娘」²⁴として下級階層の娘たちであることを明らかにし、日本人女性との“結婚”について外国人の間で誤解が生じるのを避けるために、「日本社会のすべてにおいて同様な柔軟な習慣があると考えすることは極めて公正さに欠け、間違っているであろう。この土地の中流階級のきちんとした家庭の娘は一人もこのような外国人の“妻”にはならないことを理解する必要がある。もっぱら土地住民の最下層の人間がこのような“妻”たちの要員を供給しているのである。」²⁵と述べる。すなわち、チェレフコヴァは一時的に日本人女性を買ったロシア人の“夫”が“結婚”をおろそかに考えていることに止まらず、貧しい境遇から“結婚”を一時的な仕事として見て冷静に行動していた日本人女性の姿を浮かび上がらせ、貧しい境遇こそ、日本人女性

の<理性的>な態度の要因であることを指摘しているといえる。

その他、“結婚”の要因を、日本人の無邪気さに求めた者もいる。

人々の陽気さ、誠実さ、無邪気さは、彼らの天賦の気高さの本質である。どこまで風習が無邪気であるのか このことは、我々のところでは罪や恥辱と考えられている不法な男女関係が彼らのところではありふれたものであることによって判断できる。少なくとも、その風習について、一度ならずここを来訪しており、おそらく、これについて詳しい人々は、こう語っている。例えばどうやら日本人の父親がある金額で外国人に自分の娘を売り渡し得たらしめとか、中流、下層階級の哀れな娘たちは親の同意もあって、嫁入りの持参金を貯めるためにみずから娼館へ入り、彼女たちのうちの誰某は、より多くの客を持ち、そのおかげでもっとお金を貯め、より羨まれんばかりの一層体面をもつ花嫁とみなされているといった話である。私は、この噂を特には信じていない。²⁶

ロシア人にとっては「罪や恥辱」である「不法な男女関係」を日本人の「天賦の気高さ」の本質とされる「陽気さ、誠実さ、無邪気さ」を判断する材料とみている。この文の著者は信じていないというが、父親が娘を外国人に売ったり、嫁入りの持参金のために自ら娼館に入る娘たちの状況は、筆者が耳にするほどに外国人の間で噂になっていたには違いない。噂を信じないとはいうものの、この文章の筆者が、“結婚”の風習の要因を日本人の性質に求めようとしていることがわかる。

ユジャコフも、日本人女性の売春行為、貞操観念について論じている。ユジャコフ自身も長崎で娘が売られる状況を見ているが、彼が人づてに聞いた“結婚”話はさらに日本人“妻”たちの“結婚”観を表している。その内容はこのようである。“妻”(世間の尊敬を集めている裕福な日本人家庭の美しい娘とされる)にすっかり心酔した若い独身の海軍士官は、一時的な結婚を永久なものに変更し、彼の長い航海の期間が終わったら、この魅力的な“妻”を自分と共にロシアへ連れていく決心をしたが、“妻”の方は、彼が航海に出ている間に、その間だけという条件で日本人男性を受け入れていた。士官はこのことに傷つき、堪えられずに二人の仲は破れてしまった。“妻”の方も士官を愛していた故に関係の決裂に傷つき、もし他の男性を受け入れることが嫌だと事前に知らせてくれていたならばそうしなかったのにと泣いた。ここにみられる若い独身の海軍士官とその“妻”の貞操観念に関する<ずれ>をユジャコフは、人類学的、民俗学的に論じ²⁷、「どちらの関係も、一時的であったが、どちらもその期間において唯一清廉なもの」²⁸としてこの事件を理解しようとしている。

これらに書き留められている日本人の“妻”たちは、ロシア人たちの理想の女性像と

は異なるもう一つの顔をみせている。いたって“結婚”に対して<冷静>で<理性>がある女性たちである。そしてこの“妻”たちの“結婚”観をロシア人たちはそれぞれに受け止め、解釈しようと試みており、彼女たちの<理性>はロシア人の興味の的であったことがわかる。そして、ロシア人士官の側から見れば、これら“妻”たちの<理性>は、<好ましさ>の一因でもあったといえるのではないであろうか。すなわち、ロシア人は一時的な“妻”として<理想的>で<理性的>な<好ましさ>を日本人女性の中に見ていたのではないであろうか。

2. ロシア人の“結婚”観

2. 1. “結婚”という表現

これまで、外国人と日本人女性との関係を“結婚”と記してきたが、これは、ロシア人による見方に従ったことである。ここで、改めてロシア人がこの関係をどのように理解してロシア語で表していたのかみてみたい。

日本において行われた外国人男性と日本人女性との“結婚”関係及びその関係にある日本人女性(洋妾、ラシャメン)、ロシア人を含めた外国人士官は、婚姻関係を表す言葉 брак(結婚)、женитьба(嫁取り)、жениться(妻を娶る)、взять себе в жень(妻を迎える)、жена(妻)、супруга(夫人)、муж(夫)、супруг(夫)などを、そのままであったり括弧を付けたりして用い、それに説明を加えて表されるのが一般的である。つまり、この関係がロシア人の定義する結婚とは異なる特殊な関係であり、説明しなければ他のロシア人には分からない関係であったといえる。具体的に“結婚”に関する主な表現をみてみよう。(出版年順に挙げる。なお、名詞、形容詞等の変化形は主格に、動詞は不定形に直した。丸数字は出典、ローマ数字大文字はロシア人あるいはヨーロッパ人男性と日本人女性との関係、同数字小文字はその関係にある者を示す。)

выкупать женщину(女性を身受けする)、i делаться вашей законной женой(法的な妻となる)²⁹、женитьба европейцев на японках(ヨーロッパ人の日本人女性との結婚)、смешение брачных форм Европы и Японии(ヨーロッパと日本の婚姻形態の混合)、сладость гражданского брака(内縁関係の愉悦)、жениться на короткий срок на японских женщинах(短期間日本人女性と結婚すること)、сладость этой части японских обычаев(日本の慣習の一つの愉悦)、i переменные жень(入れ替わる妻たち)、ii супруга(夫人)、iii жень(妻)、iv супруг(夫)、v сожител(男性同棲者)³⁰、заводить себе японских жен, удовольствие не дорогое... (後略)(日本人の妻を娶る、高くはない愉悦)、русско-японские браки(ロシア人と日本人の結婚)、i жень(妻たち)³¹、“на семейном положении”

(“既婚の状態で”)³²、.взять себе в жены на любой срок любую японскую девушку(好きな期間好きな日本の娘を妻に迎えること) .брать себе на время стоянки там так называемых “жен”(碇泊中いわゆる“妻”を迎えること) .обычай обзаводиться японскими “женами”(日本人の“妻”を手に入れる慣習) .временный союз с европейцем(ヨーロッパ人との一時的な夫婦関係) .купля-продажа(売買) i “японские жены”русских офицеров(ロシア人士官の日本人の妻) ii .“Madame Chrysantème”(“お菊さん”) iii .“жены”(“妻たち”) iv .“эти дамы”(“これらの疑わしき婦人たち”) v .“муж”(夫)³³ .обычай временной женитьбы(一時的な結婚の慣習)³⁴ .обычай временных браков, заключаемых на определенный срок(一定期間結ばれる一時的な結婚の慣習) .временные браки на те несколько лет, сколько обыкновенно судно бывает в плавании в водах Тихого океана(通常船が太平洋の海に航海している何年かの予定で結ぶ一時的な結婚) .семейная жизнь наших моряков в Нагасаки(長崎における我が水兵たちの家庭生活) .временный брак(一時的な結婚) i жена(妻) ii муж(夫) iii .европейские мужья(ヨーロッパ人の夫)³⁵、.смешанные браки(雑婚) .оригинальные семьи(風変わりな家庭) .туземные европейско-японские, или иначе-христианско-буддистские и христианско-шинтоистские семьи(この土地のヨーロッパと日本、あるいは別の言葉でいえばキリスト教と仏教、キリスト教と神道の家庭) i жены(妻たち) ii .“этажерная безделушка”(“重ね棚の小さな飾り物”) iii .европейские мужья(ヨーロッパ人の夫たち)³⁶ .временные браки, которые тогда носили действительно характер браков(実際の結婚の性質を帯びた一時的な結婚) .обычай Иносью(稲佐の慣習) .японский брак(日本での結婚) .вырождение браков с иностранцами в форму обыкновенного разврата(単なる淫乱の形態をとった外国人との結婚への退化) .европейско-японская семья(ヨーロッパ人と日本人の家庭) i .“жена”(“妻”) ii жена(妻) iii хотя временно, женатые люди(一時的ではあるが、妻帯している者たち) iv .новый сожитель(新しい男性同棲者) v .жених(婿がね) vi супруг(夫) vii новобрачные(新婚夫婦)³⁷ .гражданский брак на самое короткое время(最短期間の内縁関係) .выдавать замуж на неделю, месяц и-много-на полгода(一週間、一ヶ月、長くて半年嫁に出すこと) .торг-брак(売買婚) i японки, временные сожительницы матросов(水兵たちの一時的な同棲者である日本人女性) ii сожитель(男性同棲者)³⁸ .“женаты” на японка(日本人女性と“結婚”している) .браки(結婚) .“брачный контракт”(“結婚の契約”) .“жениться”(妻を娶る) .“смотрины”(“お見合い”) .“брак”(“結婚”) i будущие японские “жены”(将来の日本人の“妻”たち) ii .

“жена”(“妻”) iii игрушечные японочки(おもちゃのような日本娘たち) iv роль домоправительницы(家令の役) v .“невесты”(“許嫁たち”) vi миниатюрное существо(微小な生き物) vii кукла(人形) viii .“наша великая княгиня”(“我々の大公妃”) ix .“муж”(“夫”)³⁹

どのロシア人も、この関係をロシア語で語る際には苦心し、それぞれが説明しながらこの関係を表そうとしている。だいたいが婚姻を表す言葉を用いていることがわかるであろう。 iii、 i を見ると、関係が一時的、短期間であるというように時間的な限りがあるものであることがわかる。 i、 i、 iii は、日本人女性との関係であること、日本、長崎、稲佐における、あるいは太平洋に航海中に生じる関係であるということを通じて日本において日本人の相手としか生じない関係であること、 iii、 iii は、男性はヨーロッパ人であること、そして、これらに加え、 は、異人種間あるいは国際間の婚姻であることを提示することによってロシア人の考える普通の、すなわちロシア人もしくはヨーロッパ人同士の結婚ではないことが示されている。特に、この婚姻形態がヨーロッパと日本の婚姻形態の混合であるという見方は や にみられる。また、 は、「семья」という家庭を表す語を用いるが、括弧付きであったり、見た目にも風変わりな家庭、人種、宗教、文化の混合の家庭であることなどを示しているなど、この“家庭”が独特なものであることを示している。 i、 iv、 は、明確に、あるいは婉曲的にこの関係が金銭の絡む人身売買であることを示し、 ii、 iii、 vi、 vii は、相手の日本人女性を軽視する言葉であり、日本人女性を、ヨーロッパにももたらされていた陶器や絵画の中に描かれた日本人女性像を想像させる芸術品、そしてお金で買った遊び道具との二つの意味を連想させる「人形」や「おもちゃ」に重ねて見てみるものがあつたことと思わせる。(茶屋の主人と契約し女性を身受する)による i のように一時的な関係であるとはいえ、実際に「法的な妻」と認識していた者もいるが、外国人との関係を含め広く人身売買を指して「незаконное сношение полов(不法な男女関係)」⁴⁰という者もいたり、 のように教会儀式を経ない内縁であることを明確に記したり、 v、 iv、 i、 ii のように、同棲、同居している者たちというように表現したりしている場合もある。アレクサンドル大公はさらに特別で、 iv、 viii は、大公の相手であったことならではの表現であり、日本人女性が、冗談ではあつても、本来なら「家令」や「大公妃」と呼ぶべき立場にあたるかのような存在と見られていたことがわかる。いずれにしても、

からわかるように、この関係は「慣習」とまでいわれ、地理的にも期間的にも特殊で、士官たちの間で広く行われる慣わしとみられていたことも明らかである。

以上は、表現、説明の内容を細々とみてみたが、丸数字は著者が同じであることを示すことから、同一人物が異なる表現で一つの事象を説明したり、またそれぞれが共通の説明の仕方をしている場合が多いこともわかる。もちろん、ロシア人は、関係が短期間の人身売買であることは最初から承知している。しかし、これらロシア人が日本人女性との関係を指して用いた言葉をみると、その関係が単なる人身売買から生じる関係ではなく、¹ や1章1節のクラスノフの記述「ロシア人士官には家で料理や優しい言葉で甲斐甲斐しく世話をしてくれる日本人女性が待っている」のように、日本人女性との関係が家庭的な役割を果たしていたと士官たちが感じていたこと、また記録を残したロシア人自身もそのように感じていたことを思わせる。それゆえに、彼らは婚姻や家庭を表すような言葉を選んでヨーロッパ人男性と日本人女性との関係を示す言葉として使用していたといえるのではないであろうか。しかし、実際の関係はそれらの言葉が表してしまうような、ロシア人の考える純粋な婚姻関係ではない。それゆえに、括弧付きの婚姻を表す言葉は、日本限定、期間限定、そして人身売買の特殊な関係を説明するために駆り出されたロシア語といえる。

ただ、このような語を使用するのは、ロシア人だけではないことにも留意しなければならない。ピエール・ロチの『お菊さん』においても「大結婚」ⁱⁱ、「結婚」ⁱⁱⁱ、「小さな結婚」^{iv}、「離婚」^v、「^{フィアンセエ}fiancée」^{vi}、「妻」^{vii}、「夫婦」といった婚姻関係を表すフランス語が使用され⁴¹、ロシア人以外の外国人にとっても、外国人と日本人女性との関係は「結婚」と表現される一般的な認識であったことを示している。 、 、 、 からは、『お菊さん』の出版以前から婚姻関係を表す言葉が使用されていたことがわかり、ロチが創り出した言葉ではないことがわかるものの、1章2節でも述べたが、ⁱⁱのように、その関係にある日本人女性を“Madame Chrysantème”と一言で呼んだ方が分かりやすくしたのはロチの功績といえる。ロチの作品を知っているシュレイデルのⁱⁱがロチの「^{ブウベ}陳列棚の人形」⁴²に似ていたり長崎の対岸同士の相互の影響、共通の認識があったことは認められるのである。

2. 2. ロシア人士官の〈微妙な感覚〉

ロシア人士官たちが日本人女性と一時的な“結婚”をしていたことは、航海中の夫や息子の帰還を待つロシアのロシア人女性の耳にも達していた。

この稲佐は、祖国の婦人たちの目にはひどい評判になっていて、多くの考えでは一時的な結婚の慣習がまさに稲佐において繰り広げられているらしいことにより、他なら

ぬこここで彼女たちの兄弟や息子たちの名声が地に落ちている。⁴³

このように、士官たちの祖国ロシアでは、彼らの“結婚”は「ひどい評判」、「不道徳な栄光」⁴⁴となっていた。これは、ロシア人が「不法な男女関係」を「罪や恥辱」と考えている⁴⁵ともあるように、ロシアにおいて、稲佐におけるような形態の婚姻が「不道徳」とみなされていたということを示している。

ロシア人が心の中で「不道徳」と感じていたことは、外国人すなわちヨーロッパ人が日本人女性と外国人男性との“結婚”を含めた人身売買の発生に影響を与えたということロシア人自身が認める発言をもしていることにも表れている。

売買春が日本古来のものではなく西欧人の渡来によって発生したものであるというユジャコーフの解釈ほどに極端にそれを表したものもある（注27参照）が、その他にも「50年代の終わりすなわち日本の港が初めてヨーロッパ人に開かれたときから、そのときまでそこにはこの病気がいったい何なのかという概念すらなかったのに、今や日本全域はいわゆる梅毒の打撃を受けている」⁴⁶ということを挙げ、外国人と日本人女性との「不法な男女関係」や父親が外国人に娘を売ったり、娘自らが嫁入りの持参金のために娼妓になるという噂を疑い、「この人々は愛すべき好感のもてる国民」⁴⁷と述べてヨーロッパ人の日本人への道徳的悪影響をほのめかしたり、「長崎湾の外国船の停泊は疑いなく街を豊かにしているが、それとともに一時的に港に客に來た海軍軍人から成る人口の外国人分子は土地の風習や土地の者たちの道徳に影響を与えないままではいられず」、「ここでのロシア分艦隊の滞在が結果として、ユダヤ人とロシアから移り住んだ者が経営する多数のさまざまな十分汚い隠れ家を置くことになった」⁴⁸と、外国人の来港が日本人の道徳に影響を与えたこと、ロシア人の滞在のために売春宿が生じたことを否定しない例がみられる。「ある士官の“妻”と恋の戯れを始めるためのあらゆる試みは、これまでであった慣習の壊乱であったらうに」⁴⁹とアレクサンドル大公の言葉も控えめではあるがそれに関連のあるものである。

ヨーロッパ人が日本において女性と関係することは、これよりもはるかに以前からヨーロッパでは有名なことであった⁵⁰が、時代が移り、稲佐のようにロシア人が大々的に“結婚”生活を送るようになってからは、その噂が現実味を帯び、祖国で息子や夫の帰りを待つロシア人女性の憂いとなっていたであろう。しかし、そのロシア人女性たちだけではなく、日本人の“妻”を“娶った”ロシア人士官本人たちも自分たちの行動につき同胞たちに対して「微妙な感覚」を覚えていたようである。

シュレイデルは稲佐で着物姿の小ロシア人に偶然出会う。

この風変わりな逗留の中にかつてはロシアのクリッパーの兵曹長であった、口ひげ

を生やし日焼けした小ロシア人を見たのは特に奇妙であった。

私を見て彼は困惑し、きまり悪がって赤面し、彼の雄々しい体型にまったく似合っていない着物の端を不器用にかき合わせながら、ようやく言い訳のように、こう発言すべきと考えた。・・・(中略)・・・

彼は、明らかにこの微妙な会話を止めたがっていたので、私はそれ以上彼を詮索するのは止めた。⁵¹

この水兵の発言は不明瞭で、知人に“結婚”生活を送る自分の姿を見られて動揺している。“妻”を得て日本風に生活していることは、旧知の者には知られたくない醜態とこの小ロシア人には思われたのであろう。この他、アレクサンドル大公は、回想録の中で、自らすすんで“妻”を娶ったとは書いていない。“結婚”は、自分が“結婚”しないことが不都合になってきたゆえのことであると、また生活を楽しみながらも“妻”への愛情は少しも回想録には著さない。このようなことから、この“結婚”は、稲佐の中では大っぴらにできることで慣習にすらなっている、稲佐外部に対しては、祖国の人々が批判的なまなざしを向けるだけではなく、“結婚”したロシア人士官自身にとっても<微妙な感覚>を覚えることであったのではないかと思われる。

このような<微妙な感覚>を隠すためでもあろう、ロシア人には、日本人女性との“結婚”を<正当化>しようとする傾向がみられる。

ユジャコフは、外国人が日本社会に売買春の観念を植えたと考えているが、それでも「通常太平洋の海に船が航海しているかぎり、我が水兵たちが、長崎において何年かの予定で一時的な結婚を結んでいたのは自然」⁵²というように、外国人が日本人の“妻”を“娶る”ことは水兵の置かれた状況から生じる自然発生的なこととして起こり得ないことではないことを認めており、また、この“結婚”の発生原因を、外国人の日本滞在を快適なものにし、彼らにホームシックを感じさせないよう努める日本人の天性の親切心と客好きを挙げる一方で、家庭なしで「見知らぬ土地、新しい生活条件と上手くやっていけない」ということと「ヨーロッパ人が現地社会から完全に孤立する結果として起こりうる不品行な始末に対する危惧」⁵³すなわち、ヨーロッパ人が見知らぬ土地で風紀を乱さないようにするためであると理解する者もあり、“結婚”は水兵の置かれた環境上生じ得、さらにもっと<不道德>な行動を防止するために、ロシア人士官の“結婚”という<不道德>な行動にはある程度の酌量の余地が与えられている。

次に挙げる文章はより<正当化>が顕著であり、ロシア人男性が、他の外国人男性よりも、また日本人男性よりも相手にした日本人女性を幸せにしているというように自負している。

この規則の例外を作るのは大体の場合において秩序ある国民であるアメリカ人と海軍士官を代表するロシア人のみである。彼らは、直接彼らの満足には関わらないことすべてに無関心で、日本の政治的、社会的事項に全く干渉しない。そのことで、ロシアのようにこれほどに強大な国家の一員がここに住むヨーロッパ人の唯一の権利 短い期間日本の女性と結婚すること を広く利用しながらも土地の者を虐待してはいないことを非常に良く思っている土地の者たちの衷心からの同情を得ている。日本の慣習の一部であるこの愉悦は、我が国民の代表者の好みに非常に適った。彼らは、長崎で、市街地ではなく稲佐村に全く孤立して居を構え、月ごとにここの彼らのもとに交替した妻たちが現れるのである。ここでは日本風に舞踏会やピクニックをしながら、各々が自分の夫人と一緒にここの家を借りている。大体において、ここでは時間が非常に楽しく過ぎ、大体において、日本を訪れたロシア人がここで過ごす時間は、彼の人生の最も快い思い出の典拠である。日本人女性は、フランス人あるいはイギリス人の妻となるよりも大喜びでロシア人の妻になる。なぜなら、第一に彼女らには非常に無礼で、第二に清潔さについてうるさいのである。ところが我が同胞は日本人がひどく難儀する下着の取り替えを頻繁にするように要求しないばかりか、その着用さえ完全に免除している。その上、イギリス人あるいはフランス人は妻が私事に干渉することを決して許さない。ところが、もし言語的な知識がそれを許すならば、ロシア人は自分の秘密を彼女に打ち明ける。⁵⁴

この規則の例外とは、他の外国人男性が日本人女性を“妻”ではなく“娼婦”として扱っていることに対していう。この文章は、当時の政治的世界情勢に絡んだ発言でもあろうが、“妻”への待遇を利用してロシア人の美点をかなり自負し、日本人女性との“結婚”を<正当化>しているようにもこの記述を読むことは可能であろう。“結婚”を“権利”と考える驕った態度や日本人を「虐待」していないと思ひ込み、それに日本人も満足していると考えている態度、また“結婚”はロシア人側からの願いで日本によって許可されたにもかかわらず、それを日本の「慣習」が提供してくれる「愉悦」としてとらえ、それがロシア人の「好みに非常に適った」と満足を覚えていることは、“結婚”が<正当>なものであるという勝手な解釈とも受け取れる。さらに、ロシア人の“結婚”に対する<寛大>な態度に日本人が満足していると述べるに止まらず、日本人女性も無礼で清潔好きで私事の干渉を拒むフランス人やイギリス人よりも、逆に言えば無礼を働かずそれ程清潔であることを求めず、できうる限りは“妻”に心の内をも打ち明ける<人間味ある>ロシア人男性の“妻”となることを喜ぶとして、ロシア人の“妻”となるのが日本人女性の<救い>であることを強調している。国民性の観点から日本人女性とロシア人男性との相性の良さを論ずることはここではできないが、日本人女性が口

シア人の“妻”となりたがった理由は、第一に報酬の良さであり⁵⁵、外国人の一時的な“妻”となるような貧家の娘にとって必要なものは、まずはお金であり、相手との性格的な相性などは二の次である。従ってここでは、ロシア人がいかに“夫”として日本人に歓迎されているか述べることで、政治的宣伝効果の他に、本来なら<不道德>である“結婚”の後ろめたさを和らげる効果もあると思われる。

さらに、“結婚”を<正当化>するような態度は、ロシア人との“家庭”と普通の日本人家庭との比較する次の文にも現れている。

日本の女性は、家庭での地位が、概して、羨むべきものではないが、自分の新しい同居人の中に日本人に嫁した友人たちよりもはるかに多く、自分の新しい同居人の中に、心遣いや優しさを屢々見出していた。⁵⁶

ここでは、日本人女性の家庭内における地位が低いことを持ち出すことで、ロシア人の文明の高さを誇るとともに、文明国家の一員たるロシア人は一時的に買った“妻”たちに「心遣い」や「優しさ」といった<慈悲>を与えているとして、日本人の妻になるよりもロシア人の“妻”となる方が日本人女性にとって幸せであるかのように書かれている。ここでも、本来なら<不道德>であるはずの“結婚”の非文明的行為の卑劣さを和らげているといえる。

日本人女性との“結婚”に<微妙な感覚>を覚えていたのはロシア人だけではなく、ほぼ同じ状況にあったロチも、日本人女性との“結婚”がヨーロッパで<不道德>にあたるものであること、それに対する自分の行動と小説の<不道德さ>を序にほめかしており⁵⁷、長崎において日本人の“妻”をもったヨーロッパ人が大体において、“結婚”に対し<微妙な感覚>を覚えていたことがうかがえる。

おわりに

ロシア人の日本人女性像を探ってみると、ロシア人には日本人女性が、女性として、また“妻”として<理想的>な女性であるとの印象があったことがわかる。その半面、ロシア人の記述には買われる側である彼女たちの人身売買に対する<理性>も際立っている。<理想的であり、理性的(わきまえている)である>という<好ましい>女性、それは<芸術品兼軽く扱えるおもちゃ>という見方にもつながる。もちろん、この<好ましき>はロシア人士官の尺度によるものである。ピエール・ロチの小説の流行で日本や日本人女性への憧れは一層強くなり、日本人“妻”たちは、短期間の滞在予定で長崎を訪れるロシア人士官には非常に<喜ばしい存在>であったといえよう。

その一方で、日本人女性との“結婚”に対してロシア人の心の内には葛藤があったと

いえる。ロシア人は、日本人女性との関係を特殊な関係とみなながらも婚姻関係を思わせると感じ、その関係をおおよそ“結婚”と呼んだが、女性を買うという文明国家の一員としての行為からは程遠い<不道德>であるその関係に<微妙な感覚>を覚えていたようである。日本人女性の<理性>や、人身売買を許す日本の環境について語ったり、ロシア人士官の“妻”の扱いを自賛して日本人の“妻”を痛めつけていないと述べたり、他の外国人や日本人家庭よりもロシア人士官の“妻”の方が恩恵を受けていることを語るロシア人の様子は、実際に人身売買が行われる場には買う(売られる)側、買われる(売る)側それぞれの立場と思惑、“結婚”を生じさせる要因と理由付けの必要性があったことを否定できない現実を反映している。そしてそれは、<不道德な>関係に通じる<微妙な感覚>をより和らげ、ロシア人の行動の正当性を主張せざるを得なかった<文明人>ロシア人の心の内をもうかがわせる。

註

- 1 ゲイリー・p・ループ著、庄山則子訳「一五四三年から一八六八年の日本における異人種間関係について 戦国および近世における人種混交と人種意識」脇田晴子、S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史 上 宗教と民俗 身体と性愛』東京大学出版会 1994
ループによると、天文12(1543)年のヨーロッパ人の初来日以降明治元(1868)年までの全時期を通じ、日本人女性は欧米人の称賛の対象であり、欧米人は日本人女性との婚姻を殆ど躊躇しなかったという。
- 2 本稿は、前号掲載「ロシア人士官と稲佐のラシャメンとの“結婚”生活について」を補うものである。本稿においても、ロシア人士官と稲佐のラシャメンとの関係(及び、ヨーロッパ人男性と日本人女性との関係)について、ロシア人の観点を重視して“結婚”の語を、またその関係にあった者を指して“夫”、“妻”の語を使用する。
- 3 *A.H.Краснов. По островам Далекého Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 68-69.*
アンドレイ・ニコラエヴィッチ・クラスノフ(1862 - 1914)地理学者、地形学者、植物学者。明治25(1892)年、同28(1895)年に来日。
- 4 Там же. стр. 69.
- 5 *С.Н.Южаков. Доброволец «Петербург». Дважды вокруг Азии. Путевые впечатления. // Русское богатство. Спб., 1894. стр. 139.*
セルгей・ニコラエヴィッチ・ユジャコーフ(1849 - 1910) 社会・政治評論家。雑誌『ロシアの富』、『大百科事典』(全22巻、啓蒙社)の編集者。長崎訪問は、明治24(1891)、同25(1892)年。
- 6 *Д.И.Шрейдер. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988. стр. 147.*
シュレイデルの来日は、明治24(1891)、同26(1893)年。この本の初版は明治28(1895)年、サンクトペテルブルグ。

- 7 *А.А.Черевкова*. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4. стр. 108.
A. A. チェレフコヴァ 女医。来日は、義勇艦隊ペテルブルグで明治 21 (1888)、同 22 (1889) 年。
- 8 *Великий князь Александр Михайлович*. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр.89.
アレクサンドル・ミハイロヴィッチ大公 (1866 - 1933) ミハイル・ニコラエヴィッチ大公の子でニコライ一世の孫。アレクサンドル三世の従弟でその皇女クセニヤと結婚し、ニコライ二世の義弟にあたる。明治 19 (1886) 年から同 22 (1889) 年まで軍艦リング号で世界周遊の際、稲佐にも滞在。同 20 (1887) 年 7 月には明治天皇に拝謁している。ロシア革命で亡命し、回想録は昭和 7 (1932) 年、パリで執筆されている。
- 9 Там же. стр.86-91.
- 10 *М.ГГребенищikov*. Путевые записки и воспоминания по Дальнему Востоку. Спб.,1887. стр.205.
ミハイル・グリゴリーエヴィッチ・グレベンシコフ 弁護士、ジャーナリスト。明治 17 (1884) 年からヴラジヴォストク移民当局書記。
- 11 *А.М.Федоров*. На восток. Очерки. Спб.,1904. стр.203,210.
引用は 203 頁より。210 頁に描かれているような夜の長崎は、ロチと同じく「リキシャリキシャ」
「三味線シャミセン」、「芸者の唄ゲイシャ」といった言葉で異国情緒を誘い、この著者が『お菊さん』読んで
いるだけに、その情景と重なる。
- 12 *Н.Гарин*. По Корее, Маньчжурии и Лясодунскому полуострову. Карандашом с натуры. Спб., 1904. стр. 334.
H. ガリン 本名ニコライ・ゲオルゲヴィッチ・ミハイロフスキー (1852 - 1906) 作家。
シベリア鉄道建設の際は技術師。旅行も多い。
- 13 *Ф.И.Кнопинг*. Через Америку и Японию. Путевые очерки. Спб., 1904. стр.244.
- 14 保田孝一 『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』増補 朝日新聞社 1990 22 頁。
- 15 *А.А.Черевкова*. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4. стр. 108.
- 16 Там же. 正しい綴りは、「Madame Chrysanthème」。
- 17 *Ф.И.Кнопинг*. Через Америку и Японию. Путевые очерки. Спб., 1904. стр.313.
正しい綴りは、「M-me Chrysanthème」。
- 18 *Д.И.Шрейдер*. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988. стр. 142.
- 19 *Великий князь Александр Михайлович*. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр.86.
- 20 Там же. стр. 87.
- 21 *К. Скальковский*. Вокруг света. Сорок шесть тысяч верста по морю и по суше. Путевые впечатления. Спб., 1881. стр. 100.
- 22 *А.А.Черевкова*. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4. стр. 108.
- 23 Там же. стр. 108-109.
- 24 Там же. стр. 108.
- 25 Там же. стр. 109.

- 26 *К. Куприянов*. От Пазгова до Нагасаки. Очерки из путешествия на Дальний Восток. // Природа и люди. Спб., 1895. №52. стр.830.
- 27 これには、ユジャコフがウラジヴォストクの日本人娼婦が尊敬すべきブルジョア階級の日本人家庭の中で受け入れられていたことを目撃したことが影響している。「若いロシア人の水兵と彼の愛する日本人妻の劇的事件」は、「一夫一妻的家族の二つの典型的衝突の鮮烈な例証」であり、部族内雑婚から一夫一妻へ移行する人類の家族進化の道がまったく正反対であったとして、妻が夫の所有物であるという観念が生じた部族内雑婚が一夫多妻に移行した過程の代表であるロシア人士官と、夫婦の貞操、女性の節操、自由な性的関係への非難という概念を培い得ない一妻多夫から自然に発展した一夫一妻の社会の代表である日本人妻の衝突と考えたのである。従って、「昔風な風習、十分な人口、女性の比較的よい地位、自由な性的関係は、放蕩や売春の防止となっていた」ことから、「茶屋」のような施設は、放蕩の巢窟ではなく、部族内雑婚時代の遺物」とさえ定義され、「現在の日本の売春は、おそらく、まったく無意識の売春、日本人の大部分の何かの誤解あるいはヨーロッパ人の影響下での少数の墮落」とまで展開している。(*С.Н. Южаков*. Доброволец «Петербург». Дважды вокруг Азии. Путевые впечатления. // Русское богатство. Спб., 1894. стр. 138-148.)
これについては、佐々木照央によっても紹介されている。(佐々木照央「自由主義的ナロードニキの日本観 *С.Н. Южаков* (1849 - 1910) の場合」『埼玉大学紀要外国語学文学篇』第20巻 1986 57-60頁)
- 28 *С.Н. Южаков*. Доброволец «Петербург». Дважды вокруг Азии. Путевые впечатления. // Русское богатство. Спб., 1894. стр.141.
- 29 *Г.Армафельт*. Корвет “Варяк” воспоминания из кругосветного плавания 1863,1864,1865,1866,1867г. Спб.,1867.
アルムフェリトの見方。 103 頁。
- 30 *Н.Бартошевский*. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868.
バルトシェフスキーの見方。 . . 38 頁、 . 39 頁、 . . i . ii . 40 頁、 iii . iv . 41 頁、 v . 43 頁。
- 31 *К.Скальковский*. Вокруг света. Сорок шесть тысяч верста по морю и суше. Спб., 1881.
スカリコフスキーの見方。 100 頁。
- 32 *В.Крестовский*. В дальних водах и странах. // Русский вестник. Спб., 1886. №2. стр .563.
クレストフスキーの見方。 . 563 頁。
- 33 *А.А.Черевкова*. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4. стр. 108.
チェレフコヴァの見方。 108 頁。 ii の正しい綴りは、「Madame Chrysanthème」。
- 34 *Н.Б.* Плавание фрегата “Память Азова” специальная корреспонденция “Всемирной Иллюстрации” XXXIII // Всемирная Иллюстрация. №1174. Спб.,1891. стр. 58.
- 35 *С.Н. Южаков*. Доброволец «Петербург». Дважды вокруг Азии. Путевые впечатления. // Русское богатство. Спб., 1894.

- ユジャコーフの見方。 . 138 頁、 . . . 139 頁、 i . ii . 139 頁、
iii . 139 頁。
- 36 *Д.И.Шрейдер*. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988.
シュレイデルの見方。 . 144 頁、146 頁、 . . . i . 147 頁、 ii . 148、
iii . 147 頁。
- 37 *А.Н.Краснов*. По островам Далекого Востока. Путевые очерки. Спб., 1895.
クラスノフの見方。 . 69 頁、 . . . 70 頁、 . 71 頁、 i . 69
頁、 ii . 70 頁、 iii . 65 頁、 iv . 69 頁、 v . vi . 70 頁、 vii . 71 頁。
- 38 *А.Виноградов*. В дальних краях. Путевые заметки и впечатления. М., 1901.
ヴィノグラードフの見方。 . 112 頁、 . 112 - 113 頁、 . 113 頁、
i . ii . 112 頁。
- 39 *Великий князь Александр Михайлович*. Книга Воспоминаний. М., 1991.
アレクサンドル大公の見方。 . . 86 頁、 . 87 頁、 . . 88 頁、
. 89 頁、 i . 86 87 頁、 ii . iii . 87 頁、 iv . v . 88 頁、 vi . vii .
viii . 89 頁、 ix . 87 頁。
- 40 *К.Куприанов*. От Глазгова до Нагасаки. Очерки из путешествия на Дальний Восток.
// Природа и люди. Спб., 1895. №52. стр.830.
- 41 *ビエール・ロティ*著、*野上豊一郎*訳「お菊さん」*伊藤整他*編『日本現代文学全集』15 外
国文学集 昭和44 36 - 118 頁。ここでは、野上豊一郎による日本語訳を使用する。
- 42 前掲、口チ。92 頁。
- 43 *Н.Б.* Плавание фрегата “Память Азова” специальная корреспонденция “Всемирной
Иллюстрации” XXXIII // Всемирная Иллюстрация. №1174. Спб., 1891. стр.58.
- 44 Там же.
- 45 *К.Куприанов*. От Глазгова до Нагасаки. Очерки из путешествия на Дальний Восток.
// Природа и люди. Спб., 1895. №52. стр.830.
- 46 Там же.
- 47 Там же.
- 48 *А.Виноградов*. В дальних краях. Путевые заметки и впечатления. М., 1901. стр. 112.
- 49 *Великий князь Александр Михайлович*. Книга Воспоминаний. М., 1991. стр. 87.
- 50 それは「日本の女の多数が、ヨーロッパ人その他の外国人と同棲し、売春婦としての手
当を受けている」と天保13(1842)年出版の『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第
7版に記載されたほどであったという。(エンディミオン・ウィルキンソン著、徳岡孝夫
訳『誤解 日欧摩擦の歴史的解明』増補改訂版 中央公論社 1982 63 頁)
- 51 *Д.И.Шрейдер*. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988.
стр. 148.
- 52 *С.Н.Южаков*. Доброволец «Петербург». Дважды вокруг Азии. Путевые
впечатления. // Русское богатство. Спб., 1894. стр.139.
- 53 *Д.И.Шрейдер*. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988.
стр. 144-145.
- 54 *Н.Бартошевский*. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб.,
1868. стр.40-41.

- 55 「英人や仏人などの洋妾にして随分多額な所得を獲た者もあったが、稲佐のラシャメンとは到底比較にならなかった。それで、市郷の貧家の娘などは、稲佐のラシャメンたらん事を切望したものである。」(古賀十二郎著、長崎学会編『丸山遊女と唐紅毛人』後編 長崎文献社 昭和44 284頁)とあるように、貧しい日本人女性は、イギリス人やフランス人よりも報酬のよりよいロシア人の“妻”となることを望んでいたようである。
- 56 *A.H.Краснов. По островам Далекого Востока. Путевые очерки. Спб., 1895. стр. 69.*
- 57 前掲、口チ。36頁。

参考文献

(日本語文献)

- ウィルキンソン、エンディミオン著、徳岡孝夫訳『誤解 日欧摩擦の歴史的解明』増補改訂版 中央公論社 1982
- 古賀十二郎著、長崎学会編『丸山遊女と唐紅毛人』後編 長崎文献社 昭和44
- 佐々木照央「自由主義的ナロードニキの日本観 C.H.ユジャコーフ(1849 - 1910)の場合」『埼玉大学紀要外国語学文学篇』第20巻 1986
- 保田孝一『最後のロシア皇帝 ニコライ二世の日記』増補 朝日新聞社 1990
- ループ、ゲイリー、P著、庄山則子訳「一五四三年から一八六八年の日本における異人種間関係について 戦国および近世における人種混交と人種意識」脇田晴子、S.B.ハンレー編『ジェンダーの日本史 上 宗教と民俗 身体と性愛』東京大学出版会 1994
- ロティ、ピエール著、野上豊一郎訳「お菊さん」伊藤整他編『日本現代文学全集』15 外国人文学集 昭和44

(露語文献)

- Александр Михайлович. (Великий князь) Книга Воспоминаний. М., 1991.*
- Армафельт Г. Корвет “Варяк” воспоминания из кругосветного плавания 1863, 1864, 1865, 1866, 1867г. Спб., 1867.*
- Бартошевский Н. Япония. Очерки из записок путешественника вокруг света. Спб., 1868.*
- Виноградов А. В дальних краях. Путевые заметки и впечатления. М., 1901.*
- Гарин Н. По Корее, Маньчжурии и Лясодунскому полуострову. Карандашом с натуры. Спб., 1904.*
- Гребенщиков М.Г. Путевые записки и воспоминания по Дальнему Востоку. Спб., 1887.*
- Кноппинг Ф.И. Через Америку и Японию. Путевые очерки. Спб., 1904.*
- Краснов А.Н. По островам Далекого Востока. Путевые очерки. Спб., 1895.*
- Крестовский В. В дальних водах и странах. // Русский вестник. Спб., 1886. №2.*
- Куприанов К. От Глазгова до Нагасаки. Очерки из путешествия на Дальний Восток. // Природа и люди. Спб., 1895. №52.*
- Н.Б. Плавание фрегата “Память Азова” специальная корреспонденция “Всемирной Иллюстрации” XXXIII // Всемирная Иллюстрация. №1174. Спб., 1891.*
- Скальковский К. Вокруг света. Сорок шесть тысяч верста по морю и суше. Спб., 1881.*
- Федоров А.М. На восток. Очерки. Спб., 1904.*

Черевкова. А.А. Брак и развод в Японии. // Русское богатство. Спб., 1889. №4.

Шрейдер Д.И. Япония и Японцы. Путевые очерки современной Японии. Токио., 1988.

Южаков С.Н. Доброволец «Петербург». Дважды вокруг Азии. Путевые впечатления. // Русское богатство. Спб., 1894.